

研究結果報告書

「戦争未亡人」恋愛小説の成立およびその周辺：
二葉亭四迷から川端康成、林芙美子まで

所属： 上海師範大学外国語学院日本語学部
役職： 副教授
氏名： 張杭萍

「未亡人」が自然の産物であれば、「戦争未亡人」は歴史の過程に認識された存在である。本研究では、この「戦争未亡人」の歴史の実態を踏まえたうえで、それが文学においてどのように発見、また再発見されたかを考察した。

日中戦争中、母性や母性愛がさかんに煽り立てられた。たとえば1939年以降『婦人公論』誌上においては、あからさまな結婚推奨の文章が頻繁に掲載されるようになる。林芙美子の作品には「母」としての従軍看護婦（『戦線』『北岸部隊』）や、傷痍兵士と結婚する主人公（『波濤』）などが現われるが、同時にそこには「献身」より「お金」がほしいと叫ぶ女性のリアルな姿も垣間見られる。戦後の作『うず潮』の戦争未亡人千代子が、将来の生計を重んじ亡き夫と求婚者のはざまに「忘却」を選んだのは、戦中飢餓感に苦しんだ林の作中人物として当然の選択であった。一方川端康成の場合、1940年に『婦人公論』に連載した九つの小説は、結婚というより愛の変奏を響かせたものである。戦中から戦後までの幾つかの作品中では、戦争で恋人を失った「半未亡人」達が、記憶と忘却の世界を行き来しており、川端にとって、処女のままで恋人を思い続ける女性像の創出こそがもう一つの「永遠」へのアプローチであり、それは政治から文学を守るためのやむを得ない手段でもあった。

二葉亭四迷は、日露戦争後の未亡人を主人公にして創作すると予告したが、その作「茶筌髪」は未完のあげくに「其面影」へと変形してしまった。「其面影」の小夜子が、夏目漱石『三四郎』の美禰子や田山花袋『蒲団』の横山芳子と同じくミッション・スクールの卒業生として造形されながらもはるかに魅力的であるのは、「戦争未亡人」という社会現象を背景として、たとえそれが夫との死別によるものであっても女性が自立できる可能性を示唆したからである。一方「私の性質として時子のような女が好きだ」（物集芳子『二葉亭先生』）と語った二葉亭は、果たして日露国力の径庭を象徴する両国婦人の知的能力の差を念頭に小夜子という理想像を生み出したのか否か、その解明を今後の課題としたい。

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

- 1、「二葉亭四迷小説に見る新しい女性像の可能性」、張杭萍、『2018年度日本語教育及び日本学国際検討会』、2018年5月12日、上海同済大学。
- 2、「二葉亭四迷ロシア文学作品の翻訳における政治的射程」、張杭萍、『2018年度阪大比較文学学会学位論文発表会』、2019年2月12日、大阪大学。

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

- 1、「林芙美子小説中飢餓叙事的緯度」、張杭萍、北京對外貿易大學『日本語學習與研究』2018.08:103-111
(海外の助成は記載しないとの同雑誌の方針により、明示するページなし)
- 2、「戦争半未亡人の精神之恋：川端康成の文学抵抗与妥協」、張杭萍、中国社会科学院外国文学研究所『外国文学評論』2019.01:62-84。
(本助成を受ける旨を明示するページ p.62)
- 3、「二葉亭四迷小説に見る新しい女性像の可能性」、張杭萍、華東理工大学出版社『日本語教育与日本学研究(2018)』2019.05:257-263。
(本助成を受ける旨を明示するページ p.257)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)